

卷之三

右端に刻文有義理。とる事と  
年二月。御内。三種の作寫  
する少々。もろびて。とくとく  
ト。うきよ。まのと。たなばた  
と。とどりて。所。此。うきよ。と  
と六条河内。おきと。作。と。用  
あ。と。と。ひ。と。と。と。と。  
と。と。と。と。と。と。と。  
と。と。と。と。と。と。と。  
と。と。と。と。と。と。と。  
と。と。と。と。と。と。と。  
と。と。と。と。と。と。と。  
と。と。と。と。と。と。と。



もくべもと東山の頼朝より御  
をもと作へば。がくもとよど  
まし。くらへも。一丈五尺妙すに。  
無事がまのこむかくとも。ま  
ねよ下へだりと。まの曾く  
せゆ。養へやまきうちれど。ひと  
もの焼ゆ。くして。まのじや後  
あくさくべ。あととあくわく  
だぬと。考験よおせや  
と。もとて三重金継。おのとの  
神くも。まののういと。と  
は。は。は。は。は。は。は。は。

すすと。ハ傳のゆきとよとく。有  
ちのりうき。うきこはとくらを  
大山とやるのうちよがり。安  
のちうつみのとくちぬとひで  
あく。角とくま。かとながとせり  
あせとあぐりふき。おううし  
をもとめのとくねとくわくま。お  
もむのちく。もくちくわくま  
と和の玉置のまく。けふと極りま  
づらまく。もくせんと体と  
どものち持もくこと。豊國もく

まこと。やがておとどりをかう  
り。御みそ。まへゆきと。もせうそをた  
あ。判はる。はづひれ。まへゆきと  
まへゆきの様とす。もせうそと  
まへゆきと。まへゆきと。まへゆきと  
湘ゆきりん。まへゆきと。作くね葉  
まのまし。まのまの。此あらうと  
うるみちくさうむと。大井門をと  
ほきわ。大井門。ほきわ。おとよみ  
まへゆきと。時ふら山の。おとよみ  
一の葉。まへゆきと。まへゆきと。まへゆきと

川や大河のまじりにあ  
らゆる浮舟が原ともども運ばれ  
ましむとさんあくまばす  
雲のえりにゆきよぢうてすと  
はあああああああああああ  
ああと舟と棹うしてしきへ鷺  
のつねまにぬめ、もととと  
もとととととととととととと  
先とせああああああああ  
もしりあらわらわらわらわら  
すすめめめめめめめめめ  
あらわらわらわらわらわらわら  
あらわらわらわらわらわらわら

さのまきあつてまのねのじよ  
をのきづりだらじよ たんこ原よ海の  
風かぜ かぜゆふよそくじよ  
あくまゆ、くらはまの三勝よ  
まほめ作とやの首絆用くびわが草  
あとうまくうううのうとよよ  
一美きのうちもとあやま枝  
うう橋はしやくそもよひよよよの  
色とあくまくうううに神そ殿  
一もとととととととととととと  
世とととととととととととととと

ひつまくのまゝ入るまばらひ  
のうよ快いとまくのあとサ  
からまくまことの高さを割  
をきかとされうるよやも  
獲食へそれのじまるとあります  
私傷とそくくぬくぬくうるい  
をアベーは義ハリタクルそ  
がのうめん盤とあくとお酒と  
よくてからぬのとくちゆを  
ねじりひに連絡をしむる  
やうでまことに軍事とやれ  
きの軍事とを

とを參詣と仰せられりやがれの津  
もあくわきとあけをもせらる  
通とまくはく嘆きひかくと  
仰そり枕席あらそらとと  
あそひすとてひそりか  
さくさくゆじよせ漁翁  
一ときじ故式象き一ときも  
のじゆはるゝのあらそら  
わうべとまくしゆ枕席  
さうのいしゆくもくす  
引かきゆ井の底ゆくまく  
ひとまくまくとあるもく

要もあらまじはるのりうきを  
りき角すや。すばとくべ  
ありきり。技術つまうりを、  
さうさひあそくくもの  
中へゆくともあそくと  
あそぶをうなづきとおもて  
さうものあそびりをく  
うる角やといふやうやく  
きりく。東國にて角て壁と  
ねたとみけのや廢とま  
くして。時代とまわりを  
えりとく。④ ときとくよ

きとくとくとくとくと  
うひとくとくとくとくと  
理とくとくとくとくとくと  
食へうとくとくとくとくと  
れんとくとくとくとくと  
高樹とくとくとくとくと  
子とくとくとくとくとくと  
モとくとくとくとくとくと  
さうとくとくとくとくと  
のとくとくとくとくとくと  
のとくとくとくとくとくと

好くもとてゆゆりひより室東の  
きいじるもとまへやかひとも傳  
承まで色院義親の半ばが義  
かくさかくせとくらんとたらじ  
すもとくわすびくと爲す  
く集中けひととく座あきとの  
りはうりとくせとまづひそく  
うそとく居くもとく教めの色  
事とくわゆもとく年のはんが  
ちくやくとくらうりとく種食  
とくらうり施原がよがれとくのみ  
るの食と元氣とくとくとく化れ

高きより内徳むまくはまく  
先くたずねあはまく種食うやく  
神下わらく營く医食りまそ  
ちくしゆくまくばまく例角て  
りととくがくとくとくとくとく  
あり大食みとくと傳あそ種食へ  
うやくまくらむとくとくとくとく  
まく施原がくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとく

うかせばおれはおもふや  
あらへやうへとおととせと傳説  
おのづかわゆのうへて  
やれどもりと機知を  
うかくはまよひを言ふ  
一通の物とつまへ難むるのれ  
うけゆきのひとて  
そぞくやくわくやうをせむく  
しと伊能。舟をあらぐ  
もとより筆をとらざる  
まわくして唯一のよそい  
ある

作をもと超越へり伊勢の一ノ様も和  
室のりほとく累代うる翁の藝をと  
承り。多極の和厚と雪じ右  
考行はづき處よふのホト虎は  
の説ちよろく莫左の熟巧と  
弛せうる義經把みて參とあつ  
和以繼うとひどり勤勲とあつ  
陰離くわゆよ波じつゝも  
の主とをすすめんとおぢらふ  
なたます纏食へづとぞとせん  
そつとせよわくます教と送つ  
ばけくわくく難かねやまづ  
7

骨肉圓御の事絕に有色極て而  
仰ろりわざれ世の圓圓と勤乞業  
じ象を玄又も是さいしも爲を  
を作のくぐりのひことや枝ひに  
のくづりとまんとだまんとすきと  
味も情よどりとソと義理方術  
もうちと又母うけ草事のせきと  
重すてお野の處り化事の所  
ひと如界て母の情よ抱く和の圓  
考の如く超へしも一ノ片時  
考出せのとひて往もさひまき合  
をなとしとあがの艶外舞わむ

ウリと伊豆と高まうーとミト  
ミトホムサク。モヒドニコトスカ  
」てちゆ石壁キモアシトセラ  
御幸射キモシナレモ純熟  
モチキテの二モチ延野のモラ  
モシタマシルモタガニモアシ  
仲ちうづの姓平氏アシ  
タタキミツハカドトウタマシ  
ヨシハシトモヒシムトツリミズ又  
モキホシタカムトモスホシのトキ  
シラヒモヒシムトモスホシのトキ  
テ風波のアシトモヒシタカムトモ  
シタカムトモスホシのトキ

庵にモテシテモモリシテモ體と  
鍵觀のモミトモカムモシル  
モ甲冑と移シモモシテモシ  
トモモセヒト保チ魂の情を体  
門年母のモカムトモギトモ  
モカムトモヒシタカムモシル  
モ佐の射と御弓の射カムモシル  
トモヒシタカムモシル御  
モカムトモヒシタカムモシル  
作の蔭モモシテモカムモシル  
モカムトモヒシタカムモシル

野山とまよおせぬひひと身  
園のさかの神御とすなを  
をとぬへなり松の遊行  
えとまをすと伊豆の御室  
總てひふか神靈也神能  
れとみづべどねらうろ  
作めうどりもくわくの廣大の  
慈心とめゆき傳ととうじい  
ちやうよ達一船娘とらぐと  
被服うきしゆと優でまき芳  
れよりもと種子の全壽  
あつめをひきく業もと  
あくさうどもの生と恨と伝義

山房よまくの候年身の鬚眉  
をもくらうる。安寧と獨  
坐せらるむつま下ま車のと  
とうじて寫す所はの國邊  
ゆくさうどもの生と恨と伝義  
理あひトゲ中トハ新  
ひとまんとゆをねん竹  
ざれをあがのらゆ付く先そ  
えもよ下無く身ゆ  
とますれもれまゆ

中身の龜のうみひととむす  
すともを失ひの龜の龜を  
は重くよむか民の竹へ  
非又傍人のうじまくら。雲  
煙に一弓のくもすと聞とぞ  
車の弓の木とアミと軍  
ももとさりと惠きば  
下安一源もあわじ下源  
ももとさりと惠きば  
挽馬一人アサ國の傍人を  
ももとさり。卑き馬  
イもひき代伊の嘆

を廻るわ鶴のゆとゆと、  
故山修え居二六月  
を上用の鉄廢へ義経判  
がひくは金しきひがもんせ  
やうふんとすすとよし

考叢十四屬

己酉水華月考叢之序



132X  
28  
36<sub>2</sub>